

緊急インタビュー

自衛隊イラク派遣を問う

小泉内閣は、国際貢献を名目に「まず自衛隊派遣ありき」という姿勢に終始した。十分な議論を尽くせないまま決まった印象が強い。政府は派遣する理由について、

日本国民だけでなく、イラク国民にも十分な説明責任を果たす必要がある。

今回は人道支援を大義名分に掲げているが、人道支援とは、武力ではなく、相互の信頼関係によって成り立ち得るもの

のだ。日本とイラク双方の間で、本音で語り合える関係を築いてい

政府関係者には、自衛隊が現地に入り、支援活動を展開すれば、おのず

通用しない。かえって誤解を招くだけだ。預言者の言葉を重んじるイスラム教では、直接語りかける行為が重要な意味を持つ。なぜ、自衛隊を派遣するのか、政

解を招くだけだ。懸念するのは、派遣される自衛隊員がどこまで異文化理解の訓練を受けているかという点だ。実際には、ほとんどの隊員

こはら・かつひろ 1965年生まれ。同志社大神学部卒、神学博士。宗教倫理学。独ハイデルベルク大などに留学後、同志社大講師を経て2000年から現職。

異文化理解 最大の防御

同志社大神学部助教授 小原 克博さん

とイラクの市民に理解してもらえろという期待感があるようだ。しかし甘い考えだ。イスラムの世界では、「沈黙こそ美德」とする日本の価値観は

府高官がきちんとイラクの市民に語るべきだ。おむね日本は好印象を抱かれていますとされる

はイスラムの予備知識がないままイラク入りし、現地学習を繰り返す結果になるだろう。宗教や文化への無理解は、誤解と

寛容の精神は、相手に理解してもらったと感じた時、初めて生まれる。日本がイラク国民の価値観や関心に呼応した言葉と行動を示すことができれば、それが最大の防御につながるのではない



るかと言えば、心もとな